

読解力を育てる指導の工夫

—三つの要素を持った発言を通して—

学習指導部 長期研究員 小原吉雄

1 はじめに

次の詩は、「虹の足」（吉野 弘）の一部である。

行手に榛名山が見えたころ
山路を登るバスの中で見たのだ、虹の足を。

生徒がこの部分から読みとったことを発言する場合、例えば、次のように発言するのではないだろうか。

「『山路を登るバスの中で見たのだ、虹の足を。』と書いてあるので、とても感激したのだと思う。」

このような〈根拠となることば〉（A）をあげながら、自分の〈考え・意見〉（B）を述べていくことは、叙述に即した読みをしていく上で、基本となる発言の仕方である。このような発言を基にして話し合っていけば、生徒は、この教材である『虹の足』の内容を叙述に即しながら互いにつかんでいくことができる。

しかし、理解の学習では、学習している教材の内容をつかませるばかりでなく、他の文章に接した場合にも読解することができるような力を育てていくことも必要である。

そこで、次のような実践を試みた。

2 実践にあたっての考え方とその方法

読解するときには、ことばを手がかりにして内容をとらえていく。読解力を育てていくには、手がかりとすることばの見出し方、つまり、ことばへの着目の仕方を、より適切で多様なものへと自ら獲得させていくことが必要であると考えられる。

上記の発言の生徒は、「山路を登るバスの中で見たのだ、虹の足を。」を手がかりにして読み取り、「『山路を登るバスの中で見たのだ、虹の足を。』と書いてあるので、とても感激したのだと思う。」と発言した。このように、生徒は自分の持っている、ことばへの着目の仕方を基にして読み取りをして、それを発言をするのだが、この発言の内容だけでは、生徒の、ことばへの着目の仕方は明確に表されていない。ことばへの着目の仕方が明確に表されるようにするには、「なぜ、そういえるのか」という、自分の読み取りに至るまでの、ことばを基にして考えたり想像したりした過程を述べるのが大切と考える。上記の発言の場合、この読み取りに至るにまでは、「普通の言い方と違った言い方をしている（倒置法を使っている）強調しているのがわかるし、『だ』と強く言い切っている」と考えた過程があったと考えられる。

このような「なぜ、そういえるのか」という〈根拠となることばについての説明〉（C）も述べさせれば、生徒自身に、読み取る際のことばへの着目の仕方を振り返らせることになると思われる。